

# 美しく育てるということ

## —身体的美育論序説—

国際日本文化研究センター機関研究員(講師)  
京都大学中核機関研究員

平 松 隆 円

はじめに

毎年いま時分になると、息子のお嫁さんを見に来るお母さんが殺到し、それへの応接が学校側では一と仕事になっていた

(石坂洋次郎「若い人」『日本文学全集』新潮社、1967年)

石坂洋次郎は「作品を書く場合、架空の話がベースでなく、ある程度本当にあったこととか、自分が目をつぶっていても、手さぐりでもものありかがわかるという状態でないと、ものが書けない」と語る。実際、岩手県横手で13年間にわたり教員生活を送り、執筆活動をした。そんな石坂洋次郎は、ミッション系の女学校を舞台とした『若い人』のなかで、学校の授業参観が嫁探しの間となっている様子を描いている。

女学校は、良い嫁入りぐちのある人はたいてい中途退学をしてしまい

(久布白落実『廃娼ひとすじ』中央公論社、1911年)

久布白落実が『廃娼ひとすじ』で書き残しているように、美人には在学中に結婚し退学する者が多かった。そのため国際日本文化研究センター教授の井上章一は、当時の女学校を評して「学校は学業に関するかぎり美人にはなにも期待していなかった」と語る。美人に学業を期待していなかったとするならば、いったい何を期待していたのだろう。

本稿では、明治から大正にかけての、教育と身体美をめぐる言説を概観することを通じて、当時の教育において「容貌の美—美人」とは、どのように考えられていたのかを検討し、今後の身体的美育論の検討への足掛かりとしたい。なお、本稿は国際日本文化研究センター「性欲の社会史」共同研究会(代表：井上章一)における成果の一部でもある。

教育における女子への期待

初代台湾総督を務めた第16代文部大臣の樺山資紀による式辞から、女子に期待しているものがみえてくる。

賢母良妻たらしむるの素養を為すに在り故に優美高尚の気風温良貞淑の資性を涵養すると俱に中人以上の生活に必須なる學術技芸を知得せしめんことを要す

(樺山資紀「地方長官会議(訓示)」『歴代文部大臣式辞集』文部省大臣官房総務課、1969年)

「賢母良妻」。つまり、優秀な国民（子ども）を育てるのに寄与する知識をもった女子を育成することが、期待された。

女子教育の目的は、婦徳を養い、良妻賢母及び女子に適當なる職業の準備を与へ、体育を重んじ、知識芸能を授け、美的趣味を涵養し、立派に我が品位を保ちながら社交的ならしめ、以て自他の為に遺憾なく生活せしむるの準備を与ふるにある

(下田次郎『女子教育』金港堂、1904年)

東京女子高等師範学校教授となった下田次郎は、女子教育の目的を婦徳、体育、知識芸能、美的趣味、品位と社交を育成し、適當な職業を与えることとする。良妻賢母は、高等女学校令（1899年、勅令第31号）によって成立する。一般的に「女は家にこもり、家事と子どもや夫の世話をする」というイメージが、良妻賢母にある。しかし実際は、職業は人間形成、国家への貢献、夫への理解に役立つとして、良妻賢母が女性の社会進出をうながした。そしてこれが、1920年代のモダンガールにつながっていく。

女子ハ弱年ノ時其精神ノ活発ナルニ任セテ男子同様ニ學問ヲ勉強スレハ大ニ其身体ノ發育ニ害アルコト通常ナルハ既ニ歐米ノ經驗ニ依テ知ル所ナリタトヒ女子カ男子同様ニ勉強シテ或ハ医者ト為リ或ハ代官師トナリ或ハ専門ノ學者トナリテ身体ニ格別ノ害ヲ見サルモ其嫁シテ母トナルニ及ヒテ其身体ノ思ハシカラサルカ又ハ其學クル所ノ兒ノ虛弱ニシテ充分ノ發育ヲナサル

(矢田部良吉「女子ノ教育」『高名大家女子教育纂論』金松堂、1887年)

良妻賢母を育てるための女子教育は、男子とは区別されなくてはならない。帝国大学初代植物学教授を務めた矢田部良吉は、女子は男子同様に学問をしてはならないと主張する。では、女子はいったい何を学ぶべきなのか。

女子に就いて貴ぶべき事は、学識、才能、芸術、体格、などいふものであるが、併し古来最も貴ばれて居るものは、容貌と徳操の二つであると思ふ。そして学識の如きは、或場合に於ては却つて女子のみに取りて邪魔になる事もある

(井上哲次郎『教育と修養』弘道館、1910年)

帝国大学初代哲学講座教授を務めた井上哲次郎にとって、女子に必要なものは、顔かたちの美しさと常に道徳を守る堅い節操である。学識は、ある場合（＝結婚）において邪魔になる。結婚できなければ、良き妻にも賢い母にもなれないからだ。

いかなる学芸が女子に必要であるかといふに、第一必須の学芸第二娯楽の学芸であります。必須の学芸といふものは、女子としてはどうしても修めて置かなければならぬものであります。裁縫割烹の如きは素より、初歩の数学、文学の一端、物理生理の初歩の如きもので、今日女学校に於て教授して居るものは是であります。娯楽の学芸といふものは、美術文芸詩歌小説音楽繪畫といふようなもので、是等は娯楽ではあるけれども、娯楽として家庭に必要なものであるものであります。先刻女子は社会の飾りであると申しましたが飾りである故に是等

娯楽の学芸を身に備へる事が自ら必要となつて居るからして、社会の飾りとして任務を果し其備を現はす事が出来る

(井上哲次郎「女子自然の任務」『巽軒講話集』博文館、1903年)

結婚をして退学していく女学生たちに、そもそも男子同様の「学識」を習得する機会はなかった。それよりも、良妻賢母として必要な知識を習得する必要がある。井上哲次郎によると、女子が学ぶべき内容は「必須の学芸」と「娯楽の学芸」である。「必須の学芸」とは、家庭経営のために必要な知識であつて、良妻賢母として必要な知識である。「娯楽の学芸」とは、「社会の飾り」として家庭に必要な知識だということ。「社会の飾り」であるために、娯楽の学芸を修める必要がある。この場合の娯楽とは、誰のための娯楽だろうか。

### 女子の本分

女子は社会に於て、常に男子の目を喜ばしむべき飾りとなる事、丁度自然界に花のあるのと甚だ相似たる状態である

(井上哲次郎「女子自然の任務」『巽軒講話集』博文館、1903年)

女子には、容貌の美しさが求められ、社会の飾りとして期待された。社会の飾りとは、いかえるならば社会の花である。それは、男子の目を喜ばせるためにある。

惟フニ造化ノ美術ハ千種万様形ヲ変シ態ヲ改メ其一端ヲ現ハシ或ハ灼々人目ヲ楽マシムルノ花奔トナリ唳々耳ヲ慰ムルノ鳴禽トナリ潺湲玉ヲ弄スルノ清流トナリ洋々魂ヲ飛ハシムルノ青海トナリ人ニ於テハ即チ優美溫柔ノ女子トナリシニハアラザルカ 苟モ社会ニシテ殺戮争鬪毫モ平和ヲ好マズ愛ノ何タルヲ解セザルニアラザルヨリハ女子ヲシテ交際社会ニ周旋ノ勞ヲ取ラシメ以テ武骨殺風ノ域ヲ変シテ優美高雅ノ處タラシメザルハナシ

(永江正直『女子教育論』博文館、1892年)

兵庫県高等女学校の初代校長を務めた永江正直は、自然の造形による美が人々を楽しませるように、女性は人間における造形の美であり、男子を楽しませねばならないという。

女子ヲシテ社会ノ愛ノ元素タラシムルハ幾何ノ度迄之ヲ望ムベキカ蓋シ女子ハ其身体ハ自然ニ美麗ナリ其音声ハ自然ニ晴朗ナリ其態度ハ自然ニ優美ナリ其心情ハ自然ニ溫柔ナリ故ニ彼ノ圭角アル男子ニ接シテハ能ク其氣ヲ和ケ其歎心ヲ得以テ社会ノ緩和劑タルニ適セリ

(永江正直『女子教育論』博文館、1892年)

社会の花 (= 社会の愛の元素) と女子がなり得るのは、生まれながらに身体が美しいからだ。女子ノ面貌ハ温和デ声と共ニ子供ガ馴付キ易イ。女子ハ先天的ナ保母デアル

(永江正直『女子教育論』博文館、1892年)

生きたる女子に色彩の美姿勢の美等がある所からして女子の美なるものが殊に愛せらる

(井上哲次郎「裸体書論」『巽軒講話集』博文館、1903年)

女子の容貌は、子どもがなつきやすいように作られている。夫となる男子だけでなく、子どもにも親しみやすい。だからこそ、妻として母としての素質がある。

女子は己れを優美にすることを勉めなければならぬのであります。己れの飾を怠り、容貌態度はどうでもよしいといふのは決して女子の道ではありませぬ

(井上哲次郎「女子自然の任務」『巽軒講話集』博文館、1903年)

就中女子にして修飾を顧みざるは女らしからぬこと既に之れを言へり、頭髮言語容儀衣服居住等之れを美化するは其の一天職と云ふべし

(加藤弘之・中島徳蔵『明治女大学』大日本図書、1905年)

したがって、容貌に気をつかわず、飾らないのは女子のすることではないと批判する。

### 女子教育における美と身体

女子教育は、良妻賢母の育成を目指した。そのなかで、女子の役割は、社会の花として男子を喜ばすことだった。では、具体的に女子教育において美はどのように扱われたのか。

美を愛するは人の性なり、醜を嫌ふは自然の情なり。されは我等が容貌の美しからんことを希ふは強ち排すべきにあらず

(澤柳政太郎『新訂女子修身訓』同文館、1918年)

今日では、「人は外見よりも心」や「人を外見で判断してはいけない」という。しかし、文部官僚であった澤柳政太郎は、美人を好むのは人間の性であるから仕方がないという。だがこれは、たんなる器量好みの主張ではない。

容貌の美なるは好く、醜なるの悪しきは勿論なり

(加藤弘之・中島徳蔵『明治女大学』大日本図書、1905年)

女は容よりも心の勝れたるを善とすべし。とは、道理の教訓なれども、心も、容も、共に、勝れたるは、一層よろしい。容、勝れたればとて、心の優しき事の妨げとは為らず

(吉村秀蔵『最新女大学』又間清華堂、1901年)

「人は見た目よりも心」と、容貌と心をわけて考えてはいない。容貌の良い者は内面も勝れ、醜い者は内面も悪いと、容貌と心の関係性に注目している。

婦容とて、容儀を整ふべき事を教へたり。容儀を整ふるは、人の親愛を得る道なるのみならず、人に対する礼儀にして、又己れの心を正しうする所以なり。之をただ虚飾の為にする事と思ふは、誤解なり

(井上哲次郎『訂正女子修身教科書』金港堂書籍、1903年)

容貌を美しく整えるのは、身だしなみの意味だけではなく、自分の心を正しくすることでもある。井上哲次郎は、容貌を美しくすることが、実質の伴わないうわべだけの飾りと批判されることを誤解であると主張する。ただ、容貌を美しくするためには、化粧や衣服に気を

つかうだけではいけない。

体操・遊戯等は、単に健康保全の為のみならず、美容のためにも必要にして

(澤柳政太郎『新訂女子修身訓』同文館、1918年)

女子教育のなかで、子どもの死亡率が高いのは母親に体力がないからだ、体育が奨励された。だが澤柳政太郎は、体育は体力をつけるためだけではなく美容のためにも必要と説く。

女の容貌の嬌艶なるを、淫れたるなど、思ふ人も有るべけれど、开は大いなる誤にて、女の嬌艶かなるは、素、これ人為に出でたるにあらず。天然自然の妙技なり。之に、人工を加へて、益其美をして、発達せしむるは、人間の義務なり

(吉村秀蔵『最新女大学』又間清華堂、1901年)

艶やかな女性を淫らだという主張がある。また、虚栄心を誘発し墮落してしまうという主張もある。だが、女性は生まれつき艶やかなのだ。したがって、それを化粧などでより美しく粧うのは当然のことであり、墮落するとはいえない。

殊ニ女子ハ自然ニ美ノ性情ニ富ミ男子ノ敬愛ヲ受クルニ適ス即チ其音声ハ清曉ナリ筋骨ハ軟骨ナリ其性質ハ温和ナリ恰モ自然ノ美ヲ授ケラレテ此世ニ来ルモノ、如シ故ニ女子ノ女子タル価値ハ美ノ思想ニ富ムノ度如何ニアリト云フモ過言ニ非ザルナリ

(永江正直『女子教育論』博文館、1892年)

女子は生まれながらに、美を授かっている。容貌が美しく、したがって思想としても美に富んでいる。ここには、外見から内面への陶冶としての身体的美育の意義が読み取れる。

面相は教育経歴に由つて多少変るもので、思慮ある者は眼も落ち付き、口も締つて居る。常に締つて居る筋肉は、絶えず働いて居るので、発達する訳であるから、多少顔の相が違ふて来る。教育のあるほど表情のある顔となつて来る

(永江正直『女子教育論』博文館、1892年)

教育は、先天的に穏和な女子の表情を、さらに豊かにする。容貌が美しいのは、よく教育され、心が美しいからであり、その美しさが外見にあらわれている。

## おわりに

容貌が美しい。よく教育され、心が美しいからこそ、その美しさが容貌にあらわれている。美と身体に関する言説を概観すると、けっして「美人」を非難しているわけではない。また、今日一般的にいわれるような、「外見より内面を重視する」こともなく、「外見と内面は別」という主張でもない。外見は内面があらわれた結果であり、また外見から内面を陶冶するという主張がみられた。

しかしながら、本稿で概観した多くの書籍が国粹主義的である博文館から刊行されており、また容貌よりも心に重きをおく主張も存在する。これらの検討は、今後の課題である。

# 編 集 後 記

関西教育学会年報（通巻第 35 号）をお届けします。

2010 年 11 月 13 日（土）、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開催されました第 62 回大会での発表をもとに、自由研究 39 編、公開シンポジウム 5 編、合わせて 44 編の論文を掲載させていただきました。ご協力くださった皆様に篤く感謝申し上げます。

関西教育学会年報 通巻第 35 号  
（非売品）

2011 年 6 月 30 日

編集発行者 関西教育学会

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科内

Tel (075) 753-3030

Fax (075) 753-3030

E-mail : kansai-educ@educ.kyoto-u.ac.jp

印刷所 (株) 土倉事務所

Tel (075) 451-4844